10　「」　─近世の歌論

16年度　南山大学

★　次の文章は本居宣長の『石上私淑言』の一節である。この文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合上、原文を一部改めてある。

　問ひて云はく、法師の恋することはいとあるまじきわざなるを、歌の道にはとがめずして、の集にもその歌ども多く見え、今もはばからａでよむはいかに。

　答へて云はく、は仏のいみじき戒めなれば、法師の深くつつしむべき事とは誰も誰もいとよく知ることにて、今もなほ①この筋に迷ふをばよにあさましき事になむすめる。しかはあれど、さやうのよき悪しきことの定めは、②その道々にてこそともかくもいひあつかふべき事なれ、歌はことなる事にて、必ず儒仏の教へにそむかじとするわざにもあらねば、そのしわざのよき悪しきなどは、③とかくいふべきにあらず。ただ　④　をむねとして、⑤心に思ひ余る事はいかにもいかにもよみ出づる道なり。

　法師は　Ａ　をのがれて　Ｂ　に入りぬるうへは、その教へを重く守りて、かりそめにも乱れたるふるまひはうちすまじきことなれども、それはなほ、⑥しひてしのびつつしむうはべの身の行ひこそさもあらめ、法師ならむからに、にはかに俗と人情のかはるべきものにあらず。みな仏菩薩のにもあるまじければ、いまだ悟りを得ざらむほどは、心の底までいさぎよく澄みはてむ事は、⑦えしもあるまじく、なほこの世の濁りも残りぬべきわざなれば、　Ｃ　を思ふ心もなどかはなからむ。これ、もとよりさるべきりなれば、心に思はむことは恥づべきにもあらず、またとがむべき事ｂにもあらず。またとりはづしてはあるまじき誤ちをし出づるも、凡夫なるほどは常のことにてせむかたなし。されば仏の戒めの重きも、人ごとにまぬかれがたく惑ひやすきゆゑぞかし。しかるを法師とｃだにいへば、心の底までみな仏のごとくなるべきものと人も思ひ、みづからもさる顔つきはすめれど、⑧そはなかなか罪重かるべきわざなり。

問１　―線部①「このに迷ふをばよにあさましき事になむすめる」の現代語訳として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　僧侶が淫欲の道に迷うことを、とてもいやしく驚きあきれたことだとしているようだ

イ　僧侶が歌の道に熱中することを、とてもいやしく驚きあきれたことだとしているようだ

ウ　僧侶が恋に落ちることは、とてもいやしく驚きあきれたことだとされるにちがいない

エ　僧侶が歌の道に熱中することを、とても素晴らしく賞賛すべきことだとしているようだ

問２　―線部②「その道々にてこそともかくもいひあつかふべき事なれ」の説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　善悪を論じることは、儒教や仏教の道で議論すべきことだ、ということ。

イ　和歌と儒仏のどちらが正しいかをこそ議論すべきだ、ということ。

ウ　和歌の出来を判断することは、和歌の道に携わる人だけで議論すべきことだ、ということ。

エ　法師の恋の問題は議論にもならないことであり、どうあつかってもかまわない、ということ。

問３　―線部③「とかくいふべきにあらず」とあるが、その理由として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　儒教や仏教は、すべてに通じる真理であり、疑問を持つべきことではないから。

イ　歌の道は、そもそも儒教や仏教に背いてはならない、というようなものではないから。

ウ　儒教や仏教は、そもそも和歌のない中国やで生まれたものであるから。

エ　法師の恋の問題は、凡人が言及すべき問題ではないから。

問４　　　④　　には、本居宣長の唱えた文学理念とされる言葉が入る。それに当てはまるものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　ゆめのうきはし　　イ　にはのおしへ

ウ　もののあはれ　　　エ　ひとのこころ

問５　―線部⑤「心に思ひ余る事はいかにもいかにもよみ出づる道なり」の現代語訳として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　心で感じ取れないようなことがあっても、なんとかして和歌として詠むのが歌の道である

イ　心に思いがあふれるようなことがあると、どのようにでも和歌として詠むのが歌の道である

ウ　なかなかうまく表現できないようなことも、なんとかして和歌として詠むのが歌の道である

エ　心にしまっておけないような秘密は、どのようにでも和歌として詠むのが歌の道である

◎問６　―線部⑥「しひてしのびつつしむうはべの身の行ひこそさもあらめ」の現代語訳として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　無理に我慢して自重する表面上のふるまいではそうだろうが

イ　秘密にして包み隠しておきながら自分のことは棚にあげるのだろうが

ウ　なんとか堪え忍んでを装おうことさえできず

エ　なんとかして人目を忍んで表面上を取り繕っているのだろうが

問７　―線部⑦「えしもあるまじく」の現代語訳として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　けしからんことで　　イ　素晴らしいことで

ウ　当然できるはずで　　エ　できるはずもなく

問８　　　Ａ　　～　　Ｃ　　に入るものの組み合せとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　Ａ　世　　Ｂ　道　　Ｃ　色

イ　Ａ　家　　Ｂ　世　　Ｃ　人

ウ　Ａ　世　　Ｂ　仏　　Ｃ　道

エ　Ａ　妻　　Ｂ　道　　Ｃ　仏

問９　―線部⑧「そはなかなか罪重かるべきわざなり」とあるが、その理由として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　法師だからといって、恋の歌を詠むような行為は、和歌の達人でもない限りできないことだから。

イ　法師だからといって、恋の歌を詠むような行為は、仏の戒めを守れなかったことにあたるから。

ウ　法師だからといって、心の隅まで仏のようだとするのは、人々の期待に背く行為だから。

エ　法師だからといって、心の隅まで仏のようだとするのは、間違ったことだから。

【確認問題】

１　波線部ａ～ｃの文法的意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ａ　ア　順接の接続助詞

　　イ　逆接の接続助詞

　　ウ　打消接続の接続助詞

　　エ　単純接続の接続助詞

ｂ　ア　格助詞

　　イ　完了の助動詞「ぬ」の連用形

　　ウ　接続助詞

　　エ　断定の助動詞「なり」の連用形

ｃ　ア　添加の副助詞

　　イ　強意（強調）の副助詞

　　ウ　類推の副助詞

　　エ　程度の副助詞

２　二重傍線部の助動詞「べき」の文法的意味として適当なものを次から選べ。

ア　推量　　イ　意志　　ウ　可能

エ　当然　　オ　命令　　カ　適当

【補充問題】

３　「世々の集」（２行目）の例として考えられる和歌集のうち勅撰和歌集（帝の命により選ばれた和歌集）を古いものから順に八つを八代集と呼ぶ。その八代集としてあてはまらないものを二つ、次の中から選べ。

①　万葉集　　②　古今集　　③　後撰集

④　拾遺集　　⑤　後拾遺集　⑥　金槐集

⑦　金葉集　　⑧　詞花集　　⑨　千載集

⑩　新古今集

【解答】

問１　ア

問２　ア

問３　イ

問４　ウ

問５　イ

問６　ア

問７　エ

問８　ア

問９　エ

【確認問題】

１　ａ＝ウ　ｂ＝エ　ｃ＝ウ

２　エ

＊選択肢のア・イ・ウ・エ・オ・カの一番上の文字を順番に「すいかとめて」と覚えておくこと。

　一人称で意志、二人称で適当（「がよい」と訳す）や命令、三人称で推量、打消語がきていたら可能が多く、連体形で「はずの」と訳せたら当然、と判断しよう。

【補充問題】

３　①・⑥

＊この二つを除くと八代集を時代順に並べたものとなる。

①は現存最古の歌集。勅撰と見なされたこともあったが、現在は疑問視されている。長歌、旋頭歌、連歌、仏足石歌などを含む。⑥は鎌倉三代将軍源実朝の私家集。

【現代語訳】

　（ある人が）尋ねて言うことには、僧侶が恋をすることは決してあってはいけないことであるのに、歌道においては咎めないで、代々の歌集にもその歌々が多く見受けられ、（また）今でも遠慮しないで詠むのはどうしてか、と。

　（それに対して私が）答えて言うことには、淫欲は仏教の厳しい戒律であるので、僧侶が深く慎まなければならないことというのは誰でも大変よく知ることであって、今もやはり（僧侶が）淫欲の道に迷うことを、とてもいやしく驚きあきれたことだとしているようだ。そうではあるけれど、そのような善い悪いの決定は、その（善悪を論ずることを役割とする儒教や仏教などの）道においてこそあれこれと議論しなくてはいけないことであるけれど、歌は（儒教や仏教とは）筋が違うことであって、必ず儒教仏教の教えに背かないでいようとする行為でもないので、その行いが良い悪いなどは、あれこれ言うべきではない。ただ「もののあはれ」（事に触れて自然と心の中にわき出るしみじみとした感情）を第一のこととして、心に思いがあふれるようなことがあると、どのようにでも和歌として詠むのが歌の道である。

　僧侶は隠遁して仏道に入ったからには、その教えを重く守って、仮にも乱れた行動はちょっとでもしてはいけないことであるけれども、それはやはり、無理に我慢して自重する表面上のふるまいではそうだろうが、僧侶であるからといって、急に俗人と人情が変わるはずのものではない。（僧侶が）皆仏や菩薩が仮に人間の姿となって現れたものでもあるはずがないので、いまだに仏教の悟りを開けないうちは、心の底まで清らかに澄み切っているようなことは、できるはずもなく、やはりこの世の濁りもきっと残っていて当然のことであるから、異性を思う感情もどうしてないことがあるだろうか、いや、あるはずだ。これは、本来そうあって当然の道理であるのだから、（異性を）心に思うようなことは恥じるべきことでもないし、また咎めるべきことでもない。また決して失敗してはいけない過ちをしでかすのも、凡夫であるうちはよくあることで仕方がない。そうであるので（恋に対する）仏の戒律の重いのも、どの人においても免れることが難しく迷いやすいからであることよ。そうであるのに僧侶とさえいうと、心の底まで皆仏のようであるはずのものと人も思い、自分自身もそんな顔つきはするようだけれど、それは（世間をも自分自身をも偽ることになるから）かえって罪が重いはずのことである。